

# 日本世代間交流学会(JSIS)

## ニューズレター

日本世代間交流学会 年1回発行

2013/5/1

No.2 (創刊号)

## ご挨拶

日本世代間交流学会 会長 草野 篤子 (白梅学園大学)



日本世代間交流学会は、会員のたゆまぬ努力によって、3回の全国大会をやり遂げ、また、日本世代間交流学会誌第3号の発刊を目前にしています。

今年の3月11日で、東日本大地震から2年を迎えました。地震、巨大津波、福島原子力発電所事故により、東日本大震災の被害は、死者・行方不明者、原発関連者を含めると2万人を超え、現在もまだ故郷を離れて避難している人の数は、31万5千人を超えています。大正期の日本が経験した関東大震災は、日本の都市化をもたらすとともに、東大セツルメントのように、地域と学生、教員などが結びつく世代間交流のきっかけをもたらしました。また、阪神淡路大震災は、「ボランティア元年」を生み、NPO法を誕生させました。このような中で、多くの日本人は、大震災を「ひとごと」ではない「わがこと」

と捉え、地域社会を再生し、復興させる多くの試みを全国で展開しています。

私たちは超少子・超高齢社会に生き、戦後すぐの「人生50年」から今や「人生90年」から「人生1Century」も、夢でなくなってきました。2010年に、『世代間交流学の創造—無縁社会から多世代間交流型社会実現のために』

(あけび書房)を上梓した折、世代間交流という概念を導入することによって、今まで当たり前のことと思われていた学問の理論枠組みが、当たり前ではなくなるパラダイムの転換の必要性を提起しました。子どもから高齢者にいたるあらゆる世代が地域と結びつき、人と人との結びつきが深まる有縁社会を創り出していくことは、地域の一人一人の人的資源を生かした「地域力」を再構築することでもあります。多世代からなる「顔の見える」関係とつながりが今ほど見直されている時は久しくありません。

最後になりましたが、日本世代間交流学会は、日本をはじめ世界中の多くの人々が、被災地のかげがえのない一人一人の住民や多世代からなる地域に対する持続的なご支援を、切に願ってやみません。

今後とも、本学会に変わらぬご支援を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

## 第3回大会を中部で開催して

### —多くの方々の協力で、世代間交流の理論化と豊かな実践交流の機会に—

日本世代間交流学会第3回大会実行委員長 名古屋芸術大学 金田利子

もう昨年の秋（10月6日）になりますが、第3回大会を無事中部圏（於名古屋芸術大学）で開催することができました。皆様のご協力に心より感謝申し上げます。

今度の大会の特徴は、内容上三つにまとめられます。さらに特記すべきことは、運営上の特徴でした。一つの大学等の機関で運営するというよりは、名古屋・中部地域とそれ以西の会員の協力によっていることがあげられます。

9月の終わりごろの日曜日、名古屋の栄という繁華街近くの広小路中央商店概振興組合の事務所に大方の実行委員が集まり最後の、たしか6回目の実行委員会もちました。そこには、副会長で第1回大会の実行委員長の栗山昭子先生も臨時に助っ人として参加されました。そして今からでも何かできることがあればというお申し出があり、中部地区の高齢者施設アドレスを調べて、その職員に向けてチラシを送付するという大変な役割を担っていただきました。京都の黒沢会員（事務局長）、大阪の中辻会員（広報担当兼事務局長代行）もおり、もちろん名古屋地域で会計担当の平山会員や当日の庶務を引きうけてくださった名古屋芸術大の院生の岡山さん、学生代表の浜野さんがおりました。中でも、今回の運営の特徴でもあるのですが、庶務担当で地域会員の吉山さんの積極的な参加があげられます。通常実行委員会を持つ名芸大の建物の場合、休日はロックされてしまうため、ご自身の勤め先で、地の利の良いこの事務所を、会場に提供していただき、そのホストも務めていただきました。総会に安くて質の良い弁当をと選んだのもその場所で、良質で割安なものが選べたのも吉山さんの知恵あつてのことでした。

そして、内容上の特徴の一つは中部で開いたこと自体にありました。中部にはウェルネス自立共生会もあり、幼老統合ケアの実践も進んでおり、潜在している実践も数多くありますのに、この種の全国大会はこれまでほとんど東西で行われ、中部地区では初めてだったからです。そして、全国の皆さんと中部の実践の交流ができたからです。東西だけでなく中部でも全国大会が行われてこそ全国へのこの活動の広がりが明らかになるからです。

二つ目の特徴はまさに上のことの表れなのですが、実践交流会が持てたことです。多湖副実行委員長の日常的なつながりのあるウェルネス関係や名古屋市や東海地域を中心に、金田のつながりも加えて北名古屋市や愛西市の実践も出され、実践家同士また研究者と実践家との交流ができ、イベント的ではない日常的な世代間交流が相当進んできていることが分かった点です。大会後の懇親会にも発展し、2時間を程、会議後の話し合いもつづき、交流が深かめられたことです。

三つ目は、テーマを「世代間交流と生涯にわたる人格発達」においたことにあります。世代間交流による相互互惠性や相乗効果については多くの論者が明らかにしています。そのことによって孤立社会を予防していくという方向性も見えてきています。概念の検討もかなり進んできました。ここでほしいのは人間自身の人格としての発達からの考察ではないかと考えられます。この観点から人間人格の発展にとって不可欠な他者性（地元愛知教育大学の折出健二副学長の基調

講演) という概念から人格発達について理論化できたことが今回の進歩だったと思います。実践的には、幼年期(金田会員)、青年期(名古屋大学平石賢二教授)、高齢者(藤原会員)の側面からのシンポジスとともに、社会教育を専門とする間野会員のコーディネートで、会場からの質問や意見等をもとに論が具体的に深められたこともよかったと思います。生涯発達において、青年期の他者とのかかわりが重要なのではないかというところが明確になってきたように思われます。

そのほかの工夫についてもいくつかお話ししたいと思います。

口頭発表についても、一つ一つの発表で完結するのではなく、終わりに30分ほど討論時間を設け、それがしやすいようにテーマを設けて、発表の場を各6件ずつ位置付けたことです。すなわち口頭発表1「子ども・青年時代の学びと世代間交流」と、口頭発表2「地域づくりと世代間交流」の二つを置きました。

ポスターも初めは2件のみだったのですが、口頭からポスターへの変更希望もあり、最終的には7件になり、教室を一つ使って行い、初めから申し込みのあった会員の書籍販売の場もそこにつくりました。

杉理事の出版された江東園の実践から生まれた書籍が皆の目を引いておりました。

口頭発表1において、増田会員の「～版画制作を通して」というサブテーマのある発表では、畳一畳分の大きな学生による版画が数点持ち込まれ、発表の資料であると同時に、見事な製作品・美術品としても会場の雰囲気を光らせていました。

参加者数も1部2部懇親会と合わせて約100名ほどあり、地元の市長や名芸大の学長も、それぞれ代理ではなくご本人が見えて熱い歓迎の辞を述べてくださり、学生たちもよく動いてくれて、全く赤字なく独立採算でできたことは、大変うれしいことでした。ひとつ失敗だったことは、名古屋には「徳重」というところが2か所あり、この会場は「徳重芸大前」であり、何もついてない「徳重」は反対の方向の緑区(南の方向)の方であることを注意書きしておかなかった為、理事の一人が遠くの徳重まで行ってしまわれ、折角朝早く出られたのに、申し訳ないことをしてしまいました。ただそれでも大会に間に合うように見えていたので、ずいぶん早く出られたのではとその熱意に脱帽の思いでした。記してお詫び申し上げます。

最後に、上記のほか、内容的な反省点をあげますと、高齢者施設職員へのチラシの送付を当初から実行委員会として計画的に行い、手ごたえのあるところには、訪問して話しをしてくるなど、地域でこの会を持つときは、地域活性化のための意識的な取組みがもっと早くからできていればよかった、そうすればもっと多くの参加者があったに違いないということがあります。しかし、参加できなくてもチラシが回り、こういう取組みがあることをかなり多くの職員に知れ渡っていることは確かです。ご協力を頂いて遅まきながらもそのことができたことは、これからの連帯に生かしたいと思う次第です。こうして皆様とともにやってきましたことはすべて無駄にせず、これからの力にしていきたいと思います。

もう一つは、感想を書いてもらおうと計画していましたが、当日運営に目を奪われ、そうした、大事な点の遂行にぬかりが出た点があげられます。

当日も会場では学会本部の会長、副会長はじめ役員・会員の皆さんや当日参加の皆さんにも、ご自身の会として進んでいろいろなことにご協力頂き、ありがとうございました。

私たちの、失敗を含みつつも積み上げてきました小さな努力が、やがて世代間交流の木に大きな実をつけていくことにつながることを確信し、第3回大会を、中部で、名古屋芸術大学で開催できましたことを心よりうれしく思っている次第です。

第4回大会のさらなる発展を祈念申し上げます。

2013年4月29日

## 建築空間と世代間交流についての考察 1303011 石丸 信明

人との交流は、どのような空気のなかで生まれやすいのか？私は、大空の下のような自然の中での交流がよりよいと考えています。自然の中では、人間が自然の一部として感じられ、感性が解放された時を共有することで、他者との交流が容易になるのではないのでしょうか。

それが建築空間になると、より繊細な配慮が求められます。歴史的には、20世紀に誕生した近代建築は、機能、用途が決まれば、世界中同じような建物を作ることを目指しました。21世紀になると、社会が急激に変化し、個人のコミュニケーション自体も困難な時代に突入した感があります。20世紀と同じような考え方ではうまくいかないが増えてきています。

まずは、アートを介しての建築空間と世代間交流について一つの実例をあげてみます。

2013年2月ニューヨーク、グッゲンハイム美術館にて、『GUTAI SPLENDID PLAY GROUND』開催されました。邦訳は、『具体 華麗なる遊び場』。1954年に芦屋市で結成され、1972年解散した前衛美術家集団「具体美術協会」の約50点に及ぶ作品が展示されました。

私はそのオープニングに参加する機会があり、表題の建築空間と世代間交流について、ひとつの経験を得ました。もちろん、芸術と美術館、様々な人種および世代間、過去の作品と現在の人々、関西とニューヨークと、場所も時間も広

がりがありますが、俯瞰して見えることができました。

グッゲンハイム美術館は、1959年、建築家フランクロイドライトが亡くなった半年後に完成しました。かたつむりの殻のような螺旋状の建物は、中央部に巨大な吹き抜け空間をはらみ、その周りをスロープ状の展示室がおりにいく。碁盤状街区に無機質な超高層建築が立ち並ぶマンハッタン島に、突然わき上がったフランクロイドライトの有機的空間の代表作でもある。この吹き抜け空間に元永定正氏の作品「水」（ポリエチレンチューブに水、インク。水、空気、重力、光で構成された彫刻。）が縦横、斜めに飛び交い、様々な色の水が浮かび、ファンタスティックな表情を作り出していました。

2月15日夕刻、松谷武判氏と堀尾貞治氏による、パフォーマンスが始まりました。約300名が見守るなか、1階の床面にロール状の和紙が幾重にも敷かれました。吹き抜けにある元永定正氏の「水」に敬意をあらわし、床に落ちる「水」の影のラインをなぞることから始まりました。次々と子どもを含む聴衆に鉛筆がわたされると、皆楽しそうに腕を動かし自分の中で浮かぶイメージを描きつづけました。突然笛がなると、その紙は撤去され、更に笛がなると、カート一杯の新聞紙がばらまかれました。皆それをちぎっては投げ、最後にちぎられた新聞紙は鯉のぼりの中に押し込められ、鯉の彫刻となりました。

レセプションやパフォーマンスの時に聞いた印象に残っている言葉は、delightful 楽しい /Funny 奇妙/Challenge 挑戦/provocative 挑発的/diversity 多様性/素材の自由/革命/pop art より面白い/などなど。皆さん、楽しそうに、高揚した感じで語ってくれました。

また、今まで他の美術館でも「具体」展に出展されている造形作家の今井祝夫氏に印象を聞くと、このグッゲンハイム美術館での展示は、今までの「具体」展とは、違う物となっている。つまり、従来の作品が標本のように並ぶ美術館の在り方では、「具体」の活動全部を表現しきれなかったと。グッゲンハイム美術館における、『GUTAI SPLENDID PLAY GROUND』では、吹き抜けのある螺旋状の展示空間が「具体」に呼応しているのか、「具体」がその空間に呼応しているのか、空間と展示が渾然一体化し、「具体」の更なる魅力を見る人々に投げかけている。フランクロイドライトの空間に「具体」が対峙し、対決していると。

「具体 華麗なる遊び場」とは、作品を絵画という二次元に封じ込めずに、動き、パフォーマンス等広げていたこと。誤解を招く言い方だが、まじめにあそぶこと。ルールは破られるべき物である。芸術の本質は、制約をはねのける子供

の心が必要ということを私たちに語りかけてきました。

もちろん、パフォーマンスという出来事を介していますが、美術館が展示品を鑑賞するという機能だけではなく、アートの楽しさを共有し、人々が交流する空間でもあることを再認識しました。

私は建築家として、本当に世代間交流を作り出す建築空間を設計できるのだろうかと自問自答しています。そこにしかない空気、やすらぎ、調和等が、その中にいる人々の感性が解放される空間を造り出したい。建築空間を使って、人が「あそぶ」と、「交流する」きっかけとなります。世代間交流は人をいきいきとさせます。私は、世代間交流が進む建築空間には、セレンディピティを人々に与する必要があると考えています。

セレンディピティ（英: serendipity）は、何かを探しているときに、探しているものとは別の価値あるものを見つける能力・才能を指す言葉である。何かを発見したという「現象」ではなく、何かを発見をする「能力」を指す。平たく言えば、ふとした偶然をきっかけに閃きを得、幸運を掴み取る能力のことである。（Wikipediaより）

## 「日本世代間交流学会 第4回全国大会」

### —超高齢社会における世代間交流—に向けて

東京都健康長寿医療センター研究所 藤原佳典

我が国の社会保障制度は、戦後の高度経済成長に支えられながら、全ての国民が医療保険に加入でき（国民皆保険）、老後に年金を受給できる（国民皆年金）など、画期的に整備されてきました。

しかし、世界に類を見ないスピードで超高齢化が進展したことにより人口構造に大きな変化が見られ、2012年には社会保障給付費の合計は109.5兆円にも上りました。

その後も、我が国の少子高齢化は進み、2050年には総人口が1億人を下回り、65歳以上の高齢者の割合が40%近くになると予想されています。

社会保障の給付において、1965年当時の我が国は、高齢者1人を現役世代（20～64歳）約9人で支える「胴上げ」型の社会でした。しかし、出生数の減少により、2012年現在では、高齢者1人を現役世代3人弱で支える「騎馬戦」型の社会になっています。さらに、今後も支え手である現役世代の減少は続き、2050年には、高齢者1人をほぼ1人の現役世代が支える「肩車」型の社会になることが予想されます。

一方、今日の我が国では、こうした人口構造の変化以外にも、社会保障制度を維持する前提となる社会・経済情勢が大きく変わってきました。例えば、非正規雇用の増大といった雇用基盤の不安定化、貧困・格差問題など、新たな課題への対応が急務です。現役世代の人口が減少する上に、増え続ける高齢者を肩車する体力もないのです。

このような激変する地域社会の大きなうねりの中で、世代間交流そのもののあり方も再考すべき時期がやってきたと思います。

つまり、これまで、私たちは、世代間交流の目的や意義として、核家族化の進行にともない断絶した世代をつなぎ、高齢者の経験・英知を次世代に伝えるということに重きを置いてきた感があります。その担い手は、ごく一部のジェネラティビティ（世代継承感）に富んだ、ボランティアな元気高齢者に依るところが多かったのです。

しかし、圧倒的な超高齢・少子化社会においては、一部の高齢者の善行に依るだけでは、社会全体へのインパクトを考えると「焼け石に水」と言っても過言ではありません。

今、ここで、私たち世代間交流学会は「人生90年社会」に即した世代間交流を提言する必要があると考えます。具体的には、できるだけ多くの高齢者のジェネラティビティを呼び覚ますこと（世代間交流の普及啓発への支援）に加えて、できるだけ長期に世代間交流を続けていただく（世代間交流の長期継続への支援）というものです。

とりわけ、筆者らが、近年、重点的に研究を開始したのは、後者についてです。世代間交流の「交流」とは、そもそも、異世代であろうが同世代であろうが、人と人のコミュニケーションであり絆のことです。高齢者と若者・子どもに真の信頼感が芽生え、互恵的効果がもたらされるためには単なるイベント的な交流ではなく、ある程度の時間を要することは明らかです。長期間の世代間交流を可能にするためには、第一に担い手たる高齢者自身が長く健康を維持し、元気である必要があります。具体的には、介護予防や健康増進プログラムと連携した世代間交流の取り組みが求められます。それでもなお、加齢とともに高齢者の心身機能は徐々に低下します。虚弱や認知機能が低下しても、ボランティアとして、人生の先輩として、尊厳をもって参画できる世代間交流プログラムを開発する必要性も実感しています。

さらに、要支援・要介護状態となり介護サービスを受ける立場になったとしても、世代間交流の場はあります。例えば、デイサービスにおける利用高齢者と職員との交流です。

全国で30,000事業所以上あるデイサービスでは、連日、若い職員が「サービス」という名を借りて利用高齢者と世代間交流を続けています。利用者の定員が20～30人だとすると介護職員や看護職員

など5、6人の職員が勤務していることになり、150,000人以上の若者の雇用を生み出していることになるでしょう。私が主治医を担当する一人ぐらしの高齢患者さんが会話する、若者とは殆どが介護サービス関係者です。そして、週1日でもその若者との交流を待ち望んでいるのです。「仕事」とはいえ、デイサービスでの世代間交流に私たち周囲の者まで、ぬくもりを感じるのは、彼ら若者のひたむきさ、明るさによるからでしょう。介護の現場の労働条件は極めて厳しいため、離職・転職率は20%とも言われます。我が国、最大かつ全国一律の世代間交流の現場を活性化することも、超高齢社会における世代間交流を支援する上で重要ではないでしょうか？

さて、来たる第4回大会(平成25年10月5日)では、「超高齢社会における世代間交流」をテーマに皆様と学際的な議論を深めたいと思います。一人でも多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

## 日本世代間交流学会 第4回全国大会

テーマ：「超高齢社会における世代間交流」

2013年(平成25年)10月5日(土)に開催されます。

日本世代間交流学会第4回全国大会が、2013年(平成25年)10月5日(土)に地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(大会長:藤原佳典(東京都健康長寿医療センター研究所社会参加と地域保健研究チーム・研究部長))において開催されます。ふるってご参加ください。皆様のご参集を心よりお待ちしております。大会の詳細につきましては、本学会ホームページに随時掲載していく予定です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

日時：2013年(平成25年)10月5日(土)、10:00~17:30

開催会場：地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター

東京都健康長寿医療センター研究所(東京都老人総合研究所)

〒173-0015 東京都板橋区栄町35-2

事務局：日本世代間交流学会第4回全国大会実行委員会

東京都健康長寿医療センター研究所社会参加と地域保健研究チーム内

電話 03-3964-3241(内4255) Fax03-3579-4776

E-mail: [mkuraoka@tmig.or.jp](mailto:mkuraoka@tmig.or.jp)

担当：倉岡正高

# 学会入会のご案内

## 役員の種類と入会手続き

### 【会員の種別】

1. 正会員 会の目的及び趣旨に賛同し、本会の事業に積極的に参加する者。役員選挙権・被選挙権をもつ。
2. 学生会員 会の目的及び趣旨に賛同し、本会の事業に積極的に参加する大学生・大学院生。役員選挙権・被選挙権をもつ。
3. 市民会員 会の目的及び趣旨に賛同し、本会の事業に積極的に参加する市民。役員選挙権・被選挙権をもたない。
4. 子ども会員 会の目的及び趣旨に賛同し、本会の事業に積極的に参加する子ども(18歳以下)。役員選挙権・被選挙権をもたない。
5. 賛助会員 会の目的及び趣旨に賛同し、本会の事業を積極的に支援する個人または団体。役員選挙権・被選挙権をもたない。

会員種別	年会費	入会金	合計金額	役員選挙権 被選挙権	学会誌送付等		
					学会誌・論文集	ニューズレター	メールマガジン
正会員	6,000円	1,000円	7,000円	○	○	○	○
学生会員	4,000円	1,000円	5,000円	○	○	○	○
市民会員	1,000円	1,000円	2,000円	×	×	○	○
子ども会員	無料	300円	300円	×	×	○	○
賛助会員	10,000円	無料	10,000円	×	○	○	○

### 【入会手続き】

1. 入会申込書を事務局までファックスしていただき、下記振込先に入会金及び年会費を振り込んでください。申込受付確認後、事務局より連絡申し上げます。

2. 名前(フリガナ)

会員の種別(正会員 学生会員 市民会員 子ども会員 賛助会員)

自宅の住所・電話番号・FAX番号・e-mail

所属先名

所属先の住所・電話番号・FAX番号・e-mailをご記入の上、FAXにてお申込みください。入会申込書は、下記URLから取得することができます。

(<http://www.jsis.jp/admission.html>)

送り先：兵庫教育大学大学院 溝邊研究室  
〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1 電話/FAX 0795-44-2197

3. 申込後、事務局からの確認連絡がない場合、ご一報ください。
4. 日本世代間交流協会会員は、年会費2,000円、入会金1,000円とします。

振込先(株)ゆうちょ銀行 記号:14340 番号:93545151

名称 ニホンセダイカンコウリュウガツカイ ※他の金融機関からの振込受取口座として利用される際は、次の内容をご指定ください。店名:四三八 店番:438 預金種類:普通預金 口座番号:9354515